

梅雨の晴れ間のある日。
本を持ち寄って話しをしました。
三人で集まりました。
つなげてくれたのは、ひよりさん。
はじめてお会いしたのは、つねこさん。
いきなり安心したのは、わたし(はち)でした。

もんぜん図書館特集号

松葉屋通信

その2

matubaya-tushin vol.21
2012.7.10



このたびの出席者

- カフェ・マゼコゼ (図書館ギャラリー) つねこさん
- 松葉屋家具店 (まつのは文庫) ひよりさん
- kai+pan (松葉屋通信制作) はち

カフェ・マゼコゼ
図書館ギャラリー 十まつのは文庫



はっぱ会議

好きな本を持ち寄ってお話し
ませんか？
という呼びかけに、こころよく応
じてくれた門前町の「マゼコゼ」
さんは、松葉屋店内の「まつのは
文庫」みたいに、ちいさな図書館
「図書館・ギャラリー」を併設し
ているカフェだったり、ワークス
ベースだったり、いろいろ多面
体コミュニケーションスペースです。
今回の松葉屋通信では、もんぜん
図書館特集号として、本を囲んだ
「井戸端会議」ならぬ「はっぱ会議」
の、その模様をお伝えします。

ひよりさん 今日なぜか絵本
ばかり持ってきてくれました。
つねこさん 私も絵本ですよ。こ
れはね、(と云って取り出したの
は「もしやもしやちゃん」ペロ
ニカさんは、たぶん一番好きな絵
本作家で、娘も大好きなの。

うちの娘(髪が)天然パーマで、
もう小さいときは今よりもっと
「もしやもしや」でね。娘と重ね
ちゃって、しかも「もしやもしや
ちゃん」の本当の名前が娘の名前
といっしょだったの、偶然にも。

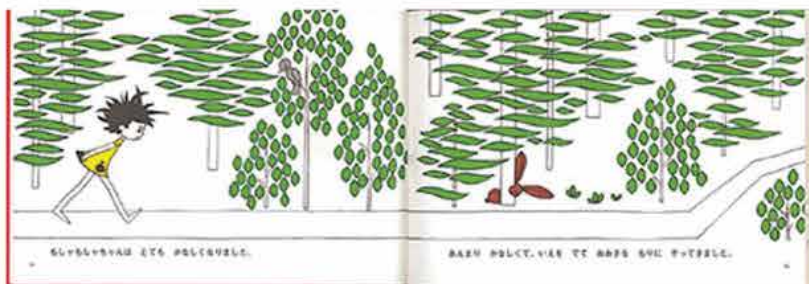


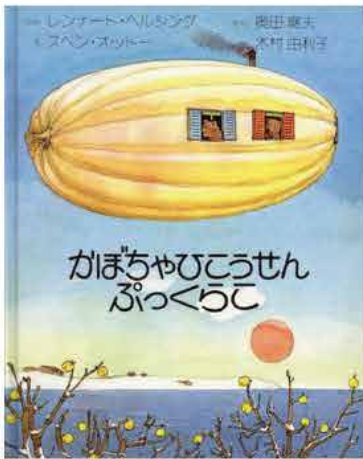
でも「もしやもしやちゃん」は、
最後にはストリートヘアーにな
るんだけど…。そしたら娘が「私
の髪はまっすぐにならないの〜」
って、泣き出しちゃって…。も
う困っちゃって。でも今は娘も大
好きみたいよ。
ひよりさん うわ〜。すごいかわ
いい…。ペロニカさんの絵もシ
ンプルで、すごく分かりやすい。

マレーク・ペロニカ ぶん・え
みや こうせい やく



もしやもしやちゃんは森の中をズンズン歩く





かぼちゃひこうせんぷくくらこ
 ぶん:レンナート・ヘルシング
 え:スベン・オットー(やく:奥田継夫・木村由利子)
 どんな状況も、またたのし、おもうことがほんとうのこと、とおしえてくれる。うたうように。
 レンナート・ヘルシングは1919年スウェーデン生まれの詩人・作家・翻訳家です。ことばの回復や擬音、韻をふんだりリズム感がゆたか、声に出して読むことが得意な本です。



エミールくん がんばる
 さく:トミー・ウンゲラー(アングラー)
 1931年フランス、ストラスブール生まれ。長い放浪生活と重病を患ったあと、ニューヨークを拠点に活躍した作家です。(やく:今江祥智)
 出会った人(人間とは限らない)のためにがんばり、そして大好きな人との「たいせつに接する知恵」を主人公のエミールくんと船長は知っているのです。



ラチとらいおん
 マレーク・ペロニカ
 1937年ハンガリーブダペスト生まれ
 文字やデザインの勉強とともに国立人形劇場のスタッフとして活動。1961年24歳の時に書いた「ラチとライオン」が高い評価を受け、ハンガリーを代表する絵本作家になる。作品は、ハンガリーの家庭でよく見られている幻燈(ディアフィルム)にもなっていて、機会があればぜひその映写機のおいととも楽しんでみたいです。

日本コダーイ協会

ハンガリーの作曲家、民俗学者、教育学者コダーイ・ゾルターン氏の理念を取り入れ、さまざまな活動をしています。わらべうたのリズムや音を体全体で感じ取り、遊びながらこどもの聞く能力やこころを育てます。

生活の中に、本のあること
 ひよりさん そうだ、こんな記事持ってきたんですよ。(昨年地震と津波ですべてを流されてしまった陸前高田の仮設図書館のオープン記事です)本を身近に置

るんですよ。
 ひよりさん 目線といえば、今日持ってきた本の半分は「童話館」っていうところの配本なんです。こどもが自分で選択できるようにするまでの間、どんな本を身近に置いたらいいかな?と思って。私の目線で選んじゃうと、すごい偏りそうだから(笑)。
 それでこの本(かぼちゃひこうせんぷくくらこ)もなんだけど、すごいいいんですよ。詩みたいなんです。最後の文が、またいいの。

つねこさん ペロニカさんて、今70歳くらいだと思うけど、子ども目線っていうか、こころっていうかが失われてないんだな、って思う。トチの実際のキップコップやこぐまのブルミンが出てくるシリーズもほんとかわいい。そういえばハンガリー(ペロニカさんの国)は「わらべうた」も大切にしている。教育現場でもよく使われているみたい。ペロニカさんの本を翻訳してる羽仁協子さんも「日本コダーイ協会」っていう活動しているんですよ。

普段は知らなくても困らないけど
 ひよりさん ところでさっきから気になってるんですけど、はちさんの持ってきた「ロボット」。
 つねこさん わたしも、実はこれ読んだことないの。今日借りるん

ひよりさん 津波で生活のすべてが流されてしまっって、でも本って、なんていうか嗜好品とまでは云わなくても、生きるための最低限必要なモノではないし、でも、本を読んでもらった時の記憶とか、その場面とかがって、すごく大切な思い出につながる。やっぱりかけがえのないものですよ。そういう場所が、ちいさくても出来たことが、もうほんと「よかったですなあと」。(ジーンとしてる)

ける環境ができることって、すごくいい活動だなっておもって。
 つねこさん あっ、これって少し関わりがあるかな。岩手に「森と風のがっこう」っていうのがあって、そのワークショップに毎年講師として参加してるんだけど、そこで集めた本が、たぶん陸前高田にいつてると思う。

カフェ・マゼッセ
 図書館ギャラリー + まつのは文庫

はっぱ会議



だったらこれだなんて、ねらってました。

はち わあ、ぜひ借りてください。これ戯曲なので、初演の時の衣装や舞台装置なんかも載っていて、わたしデザインはロシアアヴァンギャルド好きなので。

つねこさん わたしも好きです。構成主義ですね。

はち ロボットは、なんて云うか、説明すると自分の解釈で伝えちゃいそうだな。まあ、読んでください。やるせない感じ？

あと持ってきたのは古い本ばかりで、これはNHKのテキスト（生物のデザイン）なんですけど、本川先生のファンになるきっかけの本なので、単行本もあるけど、あえて持ってきました。

なまこの先生、歌う生物学者としても有名です。例えば、からだの大きいゾウのからだの細胞が、からだの小さいねずみの細胞くらい働いてエネルギーを使うと、その代謝熱だけで体温が上がりすぎてゾウが丸焼けになっちゃう。だから大きいからだの細胞は働き過ぎないようになってる、大企業と小企業の構成員のはたらき方みたい。というようなことが書いてある。

つねこさん・ひよりさん えー。(笑)

つねこさん でも専門家の人のお話してもよろいですよね。

そんな見方があったのか。とか深く掘り下げていったことで、かえって世界が広がるような。

ひよりさん うんうん。本って、別に普通に暮らしてたら知らなくてもいいことでも知ることができるんですね。

「せつない」という表現

あと、前に読んだときはピンとこなかったけど、読み返してみたら「あー、こーゆーことかあ」って分かったような気がしたりして。そんな、繰り返しも見がある。

はち わたし読み返してばかりです。オスカー・ワイルドとか泉鏡花とか、何度読んでも新鮮です。せつない系ですね。

つねこさん そういえば「せつない」って感覚、英訳できないんですけど、日本人独特の表現みたい。

はち うちの母、よく云ってた。つねこさん そうそう長野の人ってよく使いますよね。夫の母もよく使う。他のところではそんなに聞かないから、地域性なのかな。

ひよりさん えー。そうなんです。驚きです。つねこさん ワイルドって云えば、大学の時の先生がワイルドの髪の毛持ってた。

ひよりさん・はち えー(おもわず引く)

つねこさん マニアだから、オーケションで落としたみたい。もうワイルドっていうと、すぐ思い出しちゃって。(笑)

「音」で伝える

つねこさん あとね、これこれ。(おおかみのこがはしってきて)

はち この人の絵、好きです!

ひよりさん この、ところどころ赤い字で書かれてるのはアイヌ語ですか?

つねこさん そうそう、アイヌのことばって、声に出して伝えるものなの、だから声に出して読むほうがいい。語りつぐ文化なんです。繰り返し音も多いことばですね。

はち 西アフリカにもたくさんありますよね。声っていうか「音」で伝えるものだったり。

つねこさん ありますね。とでも根源的な感じがします。(あーもう時間がきてしまいました)



おおかみのこがはしってきて

文：寮美千子
画：小林敏也

アイヌの人の言葉遊びをもとにしたこの本は、自然との向き合い方(哲学といってもいい)を感じ取ることができます。わたしたちは、忘れていたように、どこか奥の方で「知っている」ことば。声に出して読みたい一冊です。また、画は「画本、宮澤賢治」をライフワークとする小林敏也さんが担当しています。



「外は緑、内は本」の図書館・ギャラリ

プランターコテッジと
図書館・ギャラリのこと

つねこさんが長野に暮らしてはじめる前、東京の国立で「プランターコテッジ」という場所を運営していました。彫刻家であり美術家のご主人が、借り受けた古い住宅をご自身の手で改装した空間。おもては緑で覆われ、なかには本がぎっしり。その様子は当時の建築・アート系雑誌などにも取り上げられ、一冊の本にもなりました。残念ながら今年5月、老朽化のため閉鎖されてしまったのですが、この空間がつねこさんたちのコミュニティのあり方を問う、実験場のようなもののはじまりでした。

本を置くと本が集まり、ものが集まり、人が集まりました。

さまざまな展示会やワークショップがひらかれたり、時にはカフェとなり食事会がはじまる。

「人と人の交わる場所を作りたい」テーマは善光寺門前のマゼコゼに引き継がれました。

図書館・ギャラリもいっしょに。そしてさらにあたらしい広がり。を期待させてくれます。

カフェ・マゼコゼと
図書館・ギャラリのこと

ギャップとあわせてさらにゆるりとしたいい気分。



おとなとこどものための揺り椅子を見つけました。

東京・渋谷にいくと立ち寄るマーガレット・ハウエルの神南店。
白を基調にした光の差し込む明るい空間にはカフェがあり、
洋服だけでなく、イギリスの古い生活道具にもあうことができます。
そして今年の6月。

ゆっくり店内を見渡して、目にとびこんできたのがこの揺り椅子。
子ども用みたいにちいさくて、動物を思わせるアームのかたち。
「すわってみて」といわれているような親しみを感じて、思わず座ってみる。
いい座り心地。

かかとを上げ下げすると揺れる、
ブランコにのってるみたいな楽しい気分になれる椅子。
もうすぐはじまる松葉屋の椅子展に仲間入りさせたら・・・とお客さまや子ども
たちのよろこぶ顔が目にかんできて、
二人で思わず「買って帰ろう」。

思った通り、いろいろな人に誉められて、うち
の子どもたちには自分用に欲しいとせがま
れました。

いつかうちの椅子の職人さんに、この椅子
を参考につくってもらおう、と思案中。
お楽しみに。

ハウエルお気に入りのアーコール社の椅子は定番で入荷しますが、
このロッキングチェアの入荷はほんとうに珍しいのだそうです。
1950～80年代のもの。材はブナや柏の木。



こどもはゆれるものが好き。



松葉屋家具店+くらし道具学研究所
〒380-0841 長野市大門町45
since1833@matubaya-kagu.com
TEL026-232-2346
FAX026-237-4558

☎ 0120-55-2346

(水曜定休)

© 松葉屋家具店+くらし道具学研究所
Copyright 2012 Matubayakaguten Co., Ltd.
All rights reserved.
文とデザイン * kai-pan

cafe MAZEKOZE(カフェ・マゼコゼ)・図書館ギャラリー

<http://rikimaze.exblog.jp>
長野市長門町1076-2 tel&fax 026-225-9380
pm12:00～18:00(月～金たまに土曜日)

「本が身近にある風景が好き」と云うマゼコゼのつねこさん。
「プランター・コテッジの頃から本を寄贈してくれる人がちらほらいて、本来だったら『くさん寄贈』って書いておくところなんだけど、それを『くさんの本棚』って紹介することにしたの。」
なるほど、人の家の本棚っておもしろいんです。個性が出るし意外性もあつたりして。
「本は大切なコミュニケーションツール、本をベースに置くことで、人との距離が近くなりますね。本の貸出しもOKなので、いろいろな人に気軽に来てほしいと思います。」

